

と天蓋開放型との間には著明な差は認められなかった。

#### 演題14. 気管部分欠損患者に対する気管外 Epithese の一症例

○滝澤 国子, 青木 一, 及川美香子  
阿部 桂, 吉田 実, 松生 達  
清野 和夫, 石橋 寛二, 佐々木 純\*  
旗福 公英\*

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座  
岩手医科大学医学部外科学第一講座\*

今回、甲状腺癌の外科的治療により残遺した永久気管孔を有する症例に対して、歯科用材料を応用した補綴物を装着して発声機能の回復を試みた。

症例は61歳、女性で、甲状腺癌の診断にて甲状腺全摘手術、第4気管輪までの気管合併切除（開窓術）を施行した。術後、永久気管孔が残遺し、呼気の流出による声門下圧の不足に起因した発声機能障害が生じた。そこで、気管孔を被覆するタイプの気管外 Epithese をシリコン樹脂にて製作、装着することにより発声機能の回復を試みた。気管外 Epithese は気管孔を覆い、上方は舌骨下部まで、側方は胸鎖乳突筋を、下方は鎖骨の一部を被覆する範囲とした。発声時には手指で圧迫保持することにより辺縁封鎖性を高め呼気の漏出を防いだ。本 Epithese 装用時の発声機能を評価するため、音量と呼気量の測定を行った。その結果、日常会話に支障を来さない程度の音量ならびに、同年齢、同体格の健常者と同程度の呼気量が得られ、発声機能は良好に回復されていることが認められた。

しかし、今回製作した気管外 Epithese には幾つかの課題が見いだされた。すなわち、1)保持装置の考案、2)痰の処理法、3)審美性の回復、4)会話時における頸部の円滑な運動、5)被覆範囲、使用材料の検討などである。なかでも、Epithese 材料の選択は最重要課題である。使用材料には欠損周囲組織と接触する部分は皮膚のような柔軟性が、気管孔に接する部分は気道確保できる硬さが要求される。今回は単一材料の使用であったため、これらの要件を満たすことはできなかった。今後、さらに検討しこれらの課題を解決していきたいと考えている。

#### 演題15. 相対的な上顎歯槽堤の後退を伴う症例について

○畠山 康人, 笹嶋 泉, 石川 成美  
中野 廣一\*, 金野 吉晃\*, 石川富士郎\*

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座  
岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座\*

交通事故は年々増加しており、歯科医がそれらの症例に対して適切な対応を迫られることが多くなってきている。また、欧米人に比べ発現率の高い唇顎口蓋患者に対する対応も、一般社会の歯科に対する要求の質的向上に伴い難しくなっている。今回、上記の原因により相対的に上顎歯槽堤が下顎に対して後退している2症例に対し、コーヌスクローネを応用した可撤性橋義歯による形態、機能ならびに審美性の回復を試みた。症例1は、交通事故により顔面部に受傷し、上顎前歯部歯槽骨ならびに同部の歯の欠損を生じ、先に述べた上下顎堤の位置関係となった症例である。症例2は、唇顎口蓋裂閉鎖術後の上顎骨の劣成長および下顎骨の過成長により、同様の状態を呈したものである。このような症例では上下顎の前歯部歯槽堤の前後関係が逆転しているため、機能時の義歯の転覆、舌運動の障害、構音障害などを生じやすく、義歯の設計においては維持力の問題、被蓋の回復の程度、偏心運動時のガイドの設定様式、義歯床辺縁の位置および厚径などが問題となる。

コーヌスクローネ応用の可撤性橋義歯では、維持力を任意に設定でき、特に前歯中間欠損では、前歯部人工歯の排列の自由度が大きく、かつ歯根膜負担が得られる。加えて、支台歯の清掃が容易である。以上の理由より、これらの症例に対してのコーヌスクローネ応用の橋義歯による補綴処置は有効なものと考えられた。

#### 演題16. 当科を受診した顎機能異常者の調査

○沖野 憲司, 藤沢 政紀, 三善 潤  
川田 毅, 佐藤 修子, 高瀬 真二  
松田 葉, 涌澤 美奈, 東海林 理  
高嶋 勉, 石橋 寛二

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座

今回顎機能異常者の動向を調べる目的で、1981年